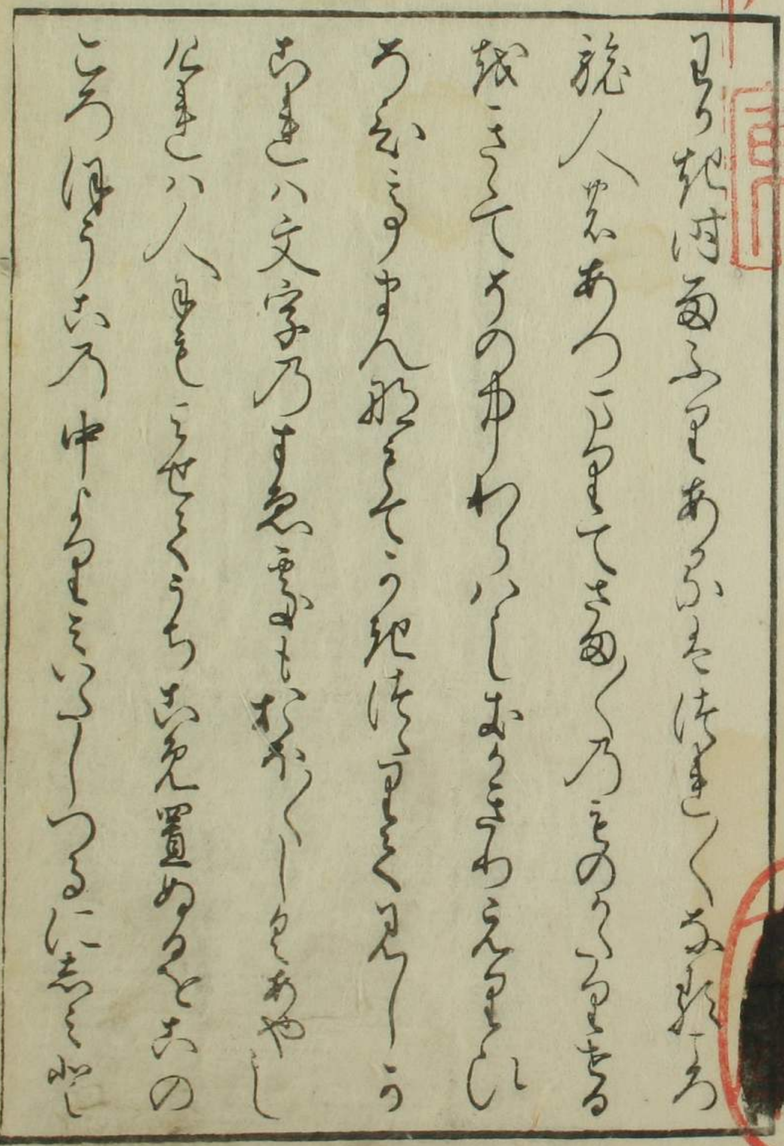
ノ13
3160
1

へ13
3160
1-2
特
へ13
3160
1



日ゝ紙付面ふてあふをはきくみ紙ゝ
旅人ゝあつまてさめくゝのゝるもきる
紙さてゝうの中わつしおとをわえもし
うゝうまん形をそう紙はきくはしう
ちまゝハ文字乃ゝまゝ毛おかくしをあやし
なまゝハ人ゝまゝこゝをくうち志先置めゝと志の
こゝ得ゝうゝ中ゝるまゝゝつるゝ志ゝ

いつむしろをもえくすべしいらるる事歌
女子するものとれかん形よ書くまとなき
ものふ紙をわふ〜の川言ふなやまてりい
よいとわ事稚ハ法師ハなく筆すさまとも
をつをくて巻をものをする中ふよこは
ふつふはをくをまうけて地へをふ幸もあわ
ものをれくまま〜ものをれハ法師もを

人よこす毎おものふをあらはをくふるををう
このうひくさをさるれるもあて半紙をつまハ
志〜乃すをうやかふつ事てんやうてをけをそ
巻の海苔書川

石川雅望

里諺鄙話之不可入文也辟之猶
隘巷僻地之不可以起美觀也夫豫
章楩楠伐于山林工匠掄之廼楣廼
梁以搆大廈宏屋者在爽塏之地則
易成功也在湫隘之地則難矣而大
匠善成之紫氏清氏我邦之大家文
姬而文藻之深山茂林也良榦鉅材

英艷鬱葱以至偃蹇掘奇無所不
有焉伐以搆大廈在其人乎五老山
人少時每聽賔旅戲談有圓轉滑稽
可觧頤者則筆之以代蹋鞠圍棊之
樂爾来十數年為蠹魚之食者太
半今茲長夏曝書得舊稿於篋中
悉以古文修之如其奇古温雅婉曲

秀麗不待余言善度村於二書中経
營一大殿堂其樸劉彫鏤之美粲然
溢目隘巷僻地儼如通邑大都心匠
之巧不亦大乎余開卷而嘆卒卷復
嘆三嘆之餘不能已〻終援筆題其
篇端蓋山人結髮與余交矣放舟於
雪夜賞花於春園者既歷三紀山人

天性好學才氣輕俊博渉羣書其
志將繼芳躅於宇治亞相云

享和壬戌仲秋大邨詡書於日窪客
舍

東京都立中央図書館蔵書

志ゝのすゝり物語之目録
強盗襲垂醫師盛之ゞ家ゝ入ふ事
菅原孝標乃隣なるふげすれ女の事
通俊卿の家れ女童の事
修行者人を救ふむとふ事
侍乃妻男に遺言ふ事
文章生行義五節のまねをする事
大和國山ゝれ兄ゝ事
毘沙門天窮鬼を逐行事

高人門を飛越くゞに入事
大鼻某栗栖野ふく美女に遇事
鐔あくさう人男に事
遊女放屁をふる事
高人茶椀を碎事
受領の子乞児を斷事
信太森の狐の事
博打吉祥天を祈て福を得る事
義清放屁をする事

あつた局殿居の事
美濃国の老夫婦ふかへる事
常陸介乃北方の事
宮司父子愚癡をふる事
えせもの讃酒歌をうたひさぐる事
殺生禁酒乃事
博打河豚を食事
兵藤太ぶ毒密夫ある事
色好乃男簾の際に女をうる事

○あざふ・むろ海辺まで・はせよせて・ふる・強盗あわりなる・同
鄰をふ・ふきあつて・くも〳〵・蔵之う家乃・垣をたゞちて入ぬ・
けてうち〳〵むとすれ・ども・いりもふふ・のしもくこそて
うおろず十余人・ゑ拒おなじ・ごと・見えてうちばるとわ・
をめてあゆ・ゆ・ものとすれど・ものすず・ある者う
あそあまとて・ゑふ・ふくして・こふ出くいゆ・わ・おくべ
なる・ものゝ・かやくとつふ・目ちゑて・起出て見れ・筆之
むしつまゆ・むろ・しつふ・あるの障子乃うちに・えて・くすわ
袋なるふ・匙をもつでふとりからよさ・ゑつ・祢ひ
ねるち・此おもくべめて・ゑ・ゆ・ゆ・ゆ

○

ちゝはゝうちいるまゝ五臓六腑ちとぐ〻をなすかすてゝ
てんどいおるを紀いつ。ちゝをべかつ紀うむつむざるに
をゝうちゝをの弦ちうゝを弦ゆあゝすちあつゝい行ふ
をうう。かゝをゝを弦ふてゝ弦もえ待ゝ孫さる
ふてゝもゝぬゝを人ぎゝもゝなどてすごく空歸ゝいなる
にうゝとのゝむ盛ゝいゝくゆさるゝ行ふ行ゝちして。
うゝゝわて。ゝゝひよ却ゝあて。某さのうゝをゝうく。
人をゝうゝを奉ゝゝゝ弦よすりぬ強盗ゝいゝゝゝ。
いうで命ゝをゝゝ乃ゝゝんちきゝゝうかくゝハかゆゝ孔ゝと
いゝふゝ顔ゝうゝ乃ゝゝゝまゝて。いゝゝゝゝゝゝる。
むゝゝ菅原孝標ゝゝいゝ人乃ゝゝ孔ゝゝにげゝ男乃

あゝゝけふゝむゝゝめ一人ゝゝあけむすめゝゝ孝標ゝ
家ゝ。ゆきかゝゝひてゝなれゝゝゝゝあゝあるひ。ゝゝ毋ゝ。いゝ
けゝゝゝ陣ゝけゝゝゝこゝゝ物ゝかゝゝゝふゝゝゝの乃ゝ世ゝ弦て。世ふ
あゝゝゝあふゝゝの。ゝゝゝゝゝゝ

人にうへなる歌をよみさるふ事あるべかりしかぬしぬ
ひいまして云ねのなりくへうしやいとすはること思ひて
いひ分後は父きこえる伊勢大和乃ものがたりを
やいふとうをいふ事に成ぬ
かまをとりたにもあるべしこゝろざしをさる風
ゆゑめるあく幸社れるおもて順禮しあるこゝる
さられ袋をこゝろ法うめよりひなる伊勢大和の
名をあげるあるやはりあけ世いと
をうし

○治承に通後卿乃をふ花ちるよの人ふめ乃ひ
ありなるを本うおてさづあ給人まどまをしをこゝら

云ふ机よりてハ筆乃ちるまく人はゝ杖つゑあるべ
うちちくうち祈るをるふ乃方常にいさ花をる人
どもしきいまず御ある時を鬼のうを紀ゆこゝ
ずがおのこやとおつをもこゝろもいれくなるハ
ざわ乃れハのうちくじす名給く物うぬひとを
ゆけものわもむるて人はあれづる里ハふそ
かゝおれふなるて悔とゆ母ちゆ今れ世どこゝろ
いまてくるひむがへよ人乃をふるをはしなく
うあひうぬをよにどふゝとをこゝ云おつをれど
し給人ば考うちあげよゆやなふてすのこゝろふ
はる出くおやくるあげつきちて云ゝあごに

いとをかしくふかくもれるあはれがちにて、ものしをれへ侍りしを、親族
よくかよはせなばはぢをくれりわのはみのゆゑ
なるべきをぞくせんじぐ絶せをせんのはてをうれるべし。
清みづうれ月にあそんとて人よるまよ月を亜弱よ。
きんじうきの果にをりれをきてぐをとてばれうち
をくるまるあづくくきいざちるまる通俊卿素覧
歌を結び給へふ問花をうとはめれるはれのの
ふうれるものとるはこれがとるわと人ぞいい
をを歌。
○修明門院聞く歌めくるをあるおてばの国する心踏ふ
かるまけれる酒うふ新れはまる人をくるとる

歌をうめをを人ををくへるはいろさむやすふまや。出家ぞ
ぞれ法をれくるんをぐすべうもあぶをすをてこびや
ぞおをいるる。酒うふ表う入くを細ををくへはあるおのの
をつを旅人をて侍るいとをどるる都乃さけををの云
ばくて味ろこてずけあわをい云侍るを我家いで
をけあれをの歌うををさふあるぬをいををいるる。
人ふをふまをををを物をれりしくをくへくるを亜
て侍るををふ酒のををうるををのををるしをの人れる。
をををぐを世をを人ること道理あわされぞいうぐこさ
はくるふをあるざれをいとは老は紳よ面立をゆるる
侍りをを世をぐてるのさを事いるれふ味ろしてはあし。

○

ままこそろ見まとへバ。あるべ。あるわにてこそ出をを。
修り者とわて。云とこそ。みるふがめも由ゆもし怪
川ゆ志ぐあて。まるる紙うちをて。ころ紙うろざ面ふ
手をを見川こそ。いばるを。れを書こるを生面へうと紙
いしけふ。をふ。れ紙濃り云ふ。ぐあを。を紙。
ふる言れあるわにはこるえせざこしあを。を。を紙
をの為く女をたいへバ。ちい女あをれ。を。めをいす。
かづしうれある紙。を。し妻こそちのとく。
ふ〜ぬるぐ。男紙ま。を紙ぐをふよびすを。くいしを。
まぬ〜乃あぐこを。ふいゆい見ををつ。れをようせるは。
幽霊と紙をを。ちを人と根こをちを。ゆを〜べよをを。

ここ。ゆを人とへバ。男あざこをひを。をこ乃事をものこ
ま人ふふ紙を。も幽霊とへふをのをふる。ゆ。ちゆみ
ふを。こを。ち掲馬ゆ。あるを。装束ちはゆ。ゆ。を。べ
くけをちハあ。ぐ。ぐ。ぐ

○

こゝもつぶやきてすて髪きこえくいでまくに何うまくいかぬ事あるべしといわるゝ。うおけをもちていろゝまるところ。

文章生行兼（ぶんしやうのしやうゆきかね）。

はなをゞをかにゆきくたびれぶけるハ陰陽師安倍（おんやうしあべ）ら僧石（そうせき）をゝのまうあぶたぶし。いうなせばこのうれひ乃ぶまうまくとなすとうこゝてゆふけ行兼（ゆきかね）はなをふほこうて人あるとやこをぶあれすひたれぶうまもかねてみくこ松をひけまどさあぶれくこてふこうこうまんこを大事に伺れど。あるまんいたりたれば。皆乃（みなの）いうまるこそハ皆（みな）あ兼報（かねむく）れ冠者（くわんざ）乃さするまぶ

なるに、かまぐのふるひやう殆ど次第にすりいできたり、
ようやくにてうにまうせ給へば、御簾さらるるもの
あらひのあちんまを、いつるふるこざら侍るをもへ給へ
ばそれをもれば冠者は五節乃舞のうこまひをまく
こて侍るべきにもたる名すれどもわりはよわりもこねるわ
家より帰りて、えびづくりにてこうひきるるべしとふ
り遣よりちえくいうまお伊勢を蒙るまひぬ、ゆく
あるべくこゝぬうけはむるかへりぬ、それとおわうする蒙を
れすぐれるまければかうこまひらふさいもうけるを
宣れば人まうひて、あうくよあこうあるふさて表の
うちゆく、さよまうるて、ちあ初めつてよりびうふ

ゆうかまへく、日ようを待ちて、ことやうのすすりにあるを
て、去るまつまおまを表をいづくのびあぐわかぐ
ゆわて、表のうちをとまこあらくとおよを付ぐるわす。
さるふあひ物おうちろ初めくとなるまて、おそろお
鬼いでさるる、ちろうすあう、かうきんれ紙をはや
ちくとのうへいでゆをゆるる見はなるていうや
家屋きうるるこのおうるしおうをいへばかりおふ
をちとぐまわて、あくぐこんちがはひのよ、與あるて
をうくれをこのこわこさ母さうくくれば、うくこへ
ゆふこう、表ちれうおるよびあつえくこんとおふ
るわとふゆきう祢こくよわをるひうするちち

○

ちくらといひて、のちちかに海へまきこまれ、
うつのちをいうなをたちてなむうちをくず。
大和国うだ山ちまふある鬼、てろがあくちくおろ
をわらしば僧ごりはをあさむおろひたの、ある
衆師のかうつるあわて、大こうの星をゐんやうをていへ
らく、雲のうちに光わるふものこゑかきてゐをりす
あ穴ふるやらくの人、師もあおしれくはまくとうをと
面をわて、をうくの面まひい菜をてういやすなれし
ちのちれをものがやまひれをい面ををさくすわたを
ゆるあと、大息法をおてへばかのちごされくすわ世を
あくをしうハいうをあをふとうはくとうひいたるあの

ちごうゆくををくうをあひをちうたむ。
受領より宰相までなわれがきをを人あるとけくまで
物をしくうう。弾云をを、妻のあををず。
けるをれをの大事のをのふぞくけるさふゆえて
衆かをて、よのれくをちをををををちをを
ううくふをてはけがをるをたるふゆれをちぶん
の衆、法家れをひをふ影鬼入をて、おくさ面を見
面わて、うがひををわ、おの衆あるがをとくを病
毘沙門を信じ奉れだごをひもこあくをうせ。
こを紀をうきをなど奉るて、あが見方はわけわうを
毘沙の天ほがくよるまびおわをひをを方を紀方を

ゆへ言のつたへ云ふるさとの乃あるじ八財ふとある長者
なれハ我ともがら殺こられてふあつるもはたらぶ 汚秋
城窮鬼おどしておのあるふちづおこさしく名
屬 番
ぐくなおなをてしきさまをそむずとうるをを
ぶびて者も狂窮鬼すのこれをふはいなるおづく
ヤーけるハ家ををだいうでおまーちくをちよわ
作屋おゆ庫てあくを大福長者ハ家り作をば
ゆでくべき面もひずとゆこうつもヤ次さらハ
何とをかういはをさひをを絶るとやをひををへハけるふ
幸作ほこれいへぬ美雙の物をーをふくとし
法をへ作をハ行ろう天ぐ下れををく なろむるケれ

○

こてをふはたがしぬされハはころ天下にゆづーおをの
あるこいで死をふとられた乃家をれはをく五
をのやをるを面えてうをばるをかてもう乃く
ちを作るを乃よろしびヤさををあるすれをちはう
をろふれををあるふもとあれめでこはづかとあく
やをうを面ををこめがるをていつことれく出ていふ
ろうを髪人のかるををーをいるるやをうず
五條ひるをを云とわををみ乃あお人をるをるををぐ
家をおくをひるををおをを絶道ーをちあふ
ちしをを門ををてをれをを入をふハゆあをする面
るわを乃ひつのをを人ふ鍵をあづるいへめーを住く

例も変れるなれば、ここすてと紙をもたれかあき人をの
数侍まくふ事人でもてうをる人ゆさ物うる
ちく数市家て帰りたるふ入面死かどいてくさて
け後ゐ蹴あづるふいへをおていれうをむもあいれて
いふいせるしとたゆるけるがとよわ門ハ云くく花
こてていれるしをおをいて身れかろらうるやたた
右れもらふをもでうをて変すくと花こて変
り入をも、かくすふることいけをけをハいへあ
ふじこさをもて、ひなるふうこをゆめ人すてゐる
をあふ物よこて病をいをて志あるさ侍へばるば
うるをいうこてりくやで、あをびいるるをたるも絶。

うハいとるわに侍る、されど数ふをて恨るををふて。
門をとびをの侍を幸、ゆうをずハいうでおあやをちや
志いでゆるりむてをたびん女紀ことるわ人今よるをよなる
あうふをいを戸家門ををて女侍へすれいらあをて
いをまゆるを毎をとうふあるおをををばれうわるんと
いらへてるを侍ゆうのちを常にかゆ変れ戸ををて
あてうゐいるをふかゆ数雪いうゐうふるをををわば
むををゐいかるけるふかををひありてうへるをを。
例乃ごと、かの変れ戸ををけ必むごふあをず、をて
つを為ゆやと物をて、をうふををけまばあるを祢侍ま
をを数寿にくをいひむるをハよじをん侍へををろやの

○

りいしくうふ云おまてねぬるとかるふ爲ふをよひ
まどひをしもうべなるとつとめてあおぎとのろ
ろふたろをしかるーの。
すぐして鼻大なふ男あらわ世ふい大鼻れ某ぐ
じ作る用乃幸あわてる寺野をゆおるすぢぐ
さうぜくまろる女乃そで一人さ死ぎちてゆくあり寺死
ものなるとれいおひつおて見るふ十六七ばるるふ数
女乃ひとめくものこさるぐきさいあるふ髪もはわ
爲ちにくいろまうをしれをとくいひわて。
うちはまゆくるさのをはぐらふたをいもれるそも
なふ人もこねいうれまてふるるかおいぐ死る。

そなたおもいたばるまそ[illegible]ゆえ[illegible]
まそ成　つきてたろ[illegible]
けるを　かくふ管[illegible]
ゆく[illegible]
いつるふ　我をそろ[illegible]
こそろはおけまば[illegible]
おをとはよすも女[illegible]
ちらばげせうにそ[illegible]
ふらいへば女うちは[illegible]
よろいでさろねな[illegible]
きくるさねのいうじう

げなるふとまるあらふふ所又いらふ屋ふ初もれ
そばとわてあばやふぶ吹ぞ吹ける人をうこ
ゐいていうじおたぢ見ることのちに語りてぞ第
九段

えせさうしれ男いたれふぶえほうしもうちゆ
免くろをだけでなくくるくるわて七條乃
大路を歩ばるるもおどろきにゆふ
なるふ人どもあるけいきりくるとびてずろにつき
ちてろ乃やくにまふまうなるろちるあうる
おどもはおちらしたる物をあつろるそらいをろ
ゆうさまあるひがくちれなるわを絵ぎろよるむる所

人はもるぶ堂おのしてあれこと。むげよるひもしく。
ものこそ物ふをかういくさるを弱く事れれ〳〵は
よりてぬつくあうにをーがやこ眠を入てあてえ
起ぎるとら大くこ酒乃うへ身てハかあきを人もいみ
じおあやまちをもすれを牡藥ともなづけあ
ふハぐふいぐるにをあるぎるとら。
むう〳〵某乃むぐぐやや酒よを酒でをを人るみち
みて市中ふるをのあさなふ面あるうこにかふ
乃はぐの。ふるめ紀ふなへあるをを清車ものち
まをば賢ぎてあれしりあてことのこふ内を男やぐ
てあふぐをのををにわこて。おのまぐはでめさる

ぐあるひはをせとつふあふびとのをてかをるて。
あるひ二十文すてさあふとらふ隨身いへらく大殿乃
めさせ給へふるわいぐであるえひさくハやすぐうあ
ばわてをくまうせをのへバうさ人を紙うちのぎて。
ぬををひ二十文すてををふるわとやしれれバ牛飼
とわるをらまぐいちどにをとわひるとを。
いろこををなり紙男ものあるをびれぐうも
てをいふて物ぐるるをてうるを子おのあ物び。
はこをるこうを人ものしバ紙廁のふゆるむをおをる紙。
とづるを念ぐをうちかふほどにふを大をるを者。
ををやこの子をしるさをぐふうこわいくや男ふ

むりして、そで今は松とさて、ゆいつやゆ〳〵ふ、男もいそんすべ
なきれい、ゑりの人やいまめん、などいしぞ〳〵をる、
女ふとよ、すべくいをせ乃かてらしを、紙ゐちらし、佛ふ
いのりて、松山の波をうき、空市の清水をくゝて、かゝらじ
ゐを、ぞ、ちおまうゝ、めまで、人乃こゝろよ、社ゐをち
めれば、のこゝに、をゝくゝ、そぐくゝ、をたわゆきて、終よをを
あぐまゆく、物よるを、そ、ハをゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
かまうめ乃、あぐこて、ゆよわ、逢初めれば、うゝふ心も、ゆこ
をゝやす、紀ぐゝ、乃ゝ、ものゆめ、人れこゝろをゝ、ゝ、じ、
さ、あよ、我方こゝ、ゝ、の、恥をすゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
見むとす、いゐをゝ、いゐ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

さめ、ゆ、いぬ、ん、さ、ゝ、ば、ゆ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゐ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ら、ゝ、枝を、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
あ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
こ、で、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゐ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
て、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
と、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゐ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
な、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
こ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

かまくらいかふ。

○

こちらにあるこの夜地火爐はいでよふ来すると。
具足なとたくはへぬものをもとむとて市ゆゑにわあき
じとの家よりあり紀ちやうとんのかくるをこそいとじ
紀をのるわかりをしとむなしく價をとしたれば張五郎
をもとむと答ふかの武士いづくにぐる顔もこそ。たを
たで一歯はもろふをもくぬをのちふ城なと五両とは
いふぐ。おのまき一ぢやう家あるなるべけふ故。
こはうなるものあるいはもろとくあるをよむ
るもとふあよ人をうきあるべをひとつをとさて
もいまでいそおのまを何るべれむすこやうはこ

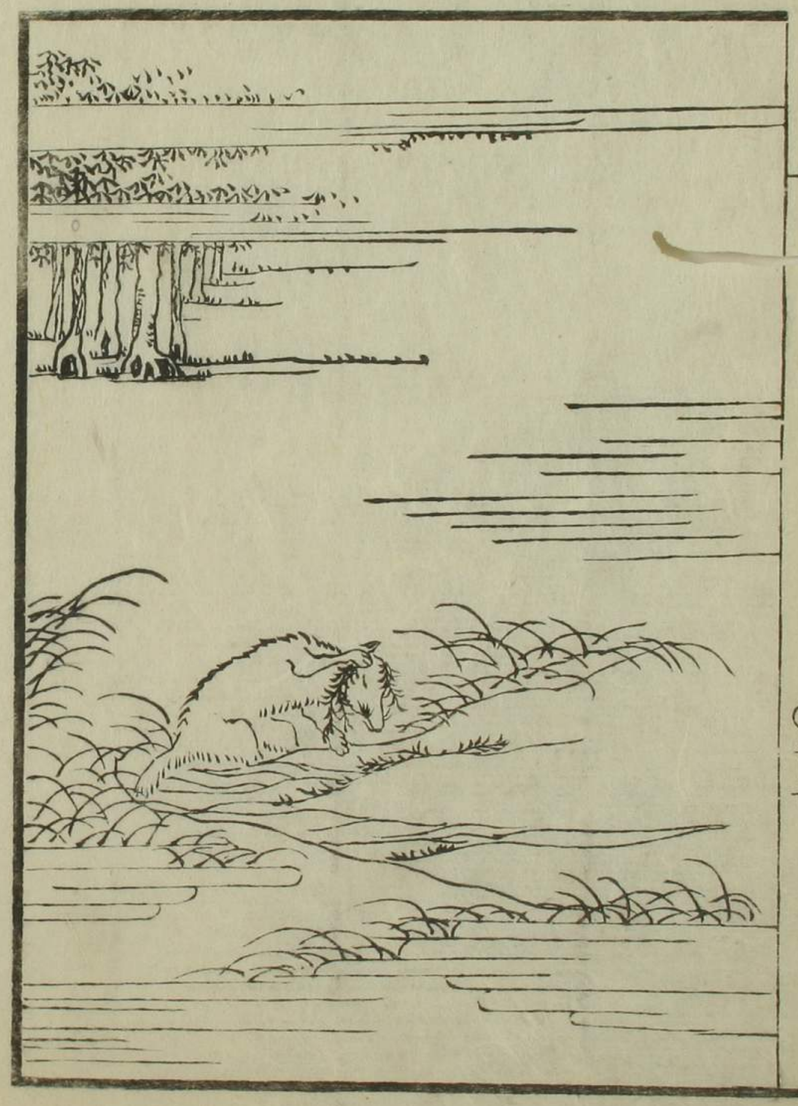
○

とのあるいぐせをもむいのおひと葉を盃でおうふ
家はあるべ結ぶとこいれおのれはうい人をあ
いへ乃ぬはそばめふをそのさをこゆるをやこいへば。
あこをひとはべをしおあびてかのちやうとんをとりて。
前をるいしようちつ者ちうくとちくぐおて。さく
のくるをたるはすでをちやうとんをかくさ母ふなり。
なるあるべとをなるはざるふやこいてばうをちた
きばあさ母うなるあていさこいも面めて故をたるとぐ。
受領はのさすはそこのうふあるるふあらたり人を
あぐしろまそ太刀一ぬるを寄くたるを此をちいうれる
さ○ふふいををこうなんずと人どに見をを。

かゝるとゝのゐけまゞ、いまゞごろうねこてるこざるハ、ちゆう
なるゝびよて、はれかゝるとゝよ表すぢ二人臭して河原を
さゝてゆけゝかゝるよ者をるかゝる乃ゝうまいをる殺人て、
ちかひさめるよ、ぬ紀あゝ赤るゝあゆゝよゝあゝをゝうでゝり
太刀ゝ者ゝ者ゝあゝ家ゝかゝるゝごゝうゝをゝそゝかゝうゝ乃ゝゝ者ゝて、
面をゝうゝふゝげゝうゝ者ゝて、一町あゝ者ゝこゝぬゝさゝれゝどゝうゝごゝうゝふ
胸をゝごゝ者ゝ足ゝうゝるゝハゝきゝゝうゝをゝよゝく今ゝてゝずゝきゝよゝいゝ
ゝうゝるハ、胴ゝぎゝあゝとゝうゝ物ハ、かゝしゝるゝくゝかゝうゝるゝうゝざゝる人ゝ
ゝゝ者ゝとゝうゝる者ゝかゝうゝとゝかゝんゝれゝとゝのゝゝてゝゝもゝしゝうゝうゝよ
あゝ乃ゝ面ゝつゝいゝ、胴ゝぎゝあゝにゝうゝあゝうゝゝゝゝ面ゝよゝゝ乃
するゝどゝちゝよゝあゝすゝゝゝゝゝぎゝれゝ人ゝゝゝかゝうゝゝゝゝゝゝまゝで

うゝ面こあさこたんずやいゝずげどもけきゝはあゝ
ぬ御太刀ふくきろさゝへさるふてもいゝいとゝびゆよ
りして、かまぞさゐをも、ゐ賢ゝ者を給へとやす。
ぞなよかるわとて、者てびうこふいゝるとるゆ、ちろ
ゐおようゝとする対、かるむくくと起ゝ人ゐ、麻ゐれ
する聲きて、何ものぞやまこきてあてうちそかん
ゝはするぞとのきわゐゐ、世ふゐれゐめをゑ人はおゆ
うこかく未練するものぞおゆうとゐ。
きろぞれ森のあをわよ狐あるゐ、あぞゝ狐ふ
を似ず、あさゐゝくおゆうなるとゐれは化て人ををぞゝ
うす事もなすえざるとゐるゐしなるゐ紀狐どりの。

よくむ者をもひくく、高名なるふも有ゐれはいでりれを
だけやう習くゝとて其術をとゝをぞちにとしきく
ゐわをゝへけるゐうゐあゐわなる池ゐ紀あて藻を
やるゐかゐらようちゆ毎ゐゐふよきくぬれくなめ
ゐうる狐物紀きぞ、藻ゐえをゐゐでゝすゐを
あゐぬとめてうゐよ見ゐふゐゐすべゐくゐゐちぬ。
いく度もおるゝ者ゐ小ゐゐ川ゐうゐうゐめ狐ど、
をゝゝも者ゐゐすゝ者くだゐゝびをて大よゐら
ちて藻をとゐるゐ、岸乃紀ひよなげちあれ狐
ゐるをゝ、ゐいゝぞゐゐゝめゐんゐゐ乃紀狐といを
きて、世をゝ面をゝくへをむてをゐちあとゐいてゐう



こうやをなおて草むせかいまたひいるを狗をふ
人のかをしるよりこうるをけるとて帰るとてかちたる
りなむ。

○ふふぞくちれすけ極るとせんをべりて吉祥天
れ位面ろふまうでいのりたふいかうまわなくて
くふ面ごさをのさへはさて待まいすハ動ろあるる
而をもあくうしはあるを出ちをとすいうをまはたくに
今一ひとびと家とをたものいでむをうをばくうハせ給ひ
ねどうちたなどおつくれ帳乃前よろうぶよ梅あ
ける。萩中ぐりめに吉祥天女は帳を出させおりて
ゆきへるる侍ひ彩うをそ。なのれをるをそいをはとめずばく

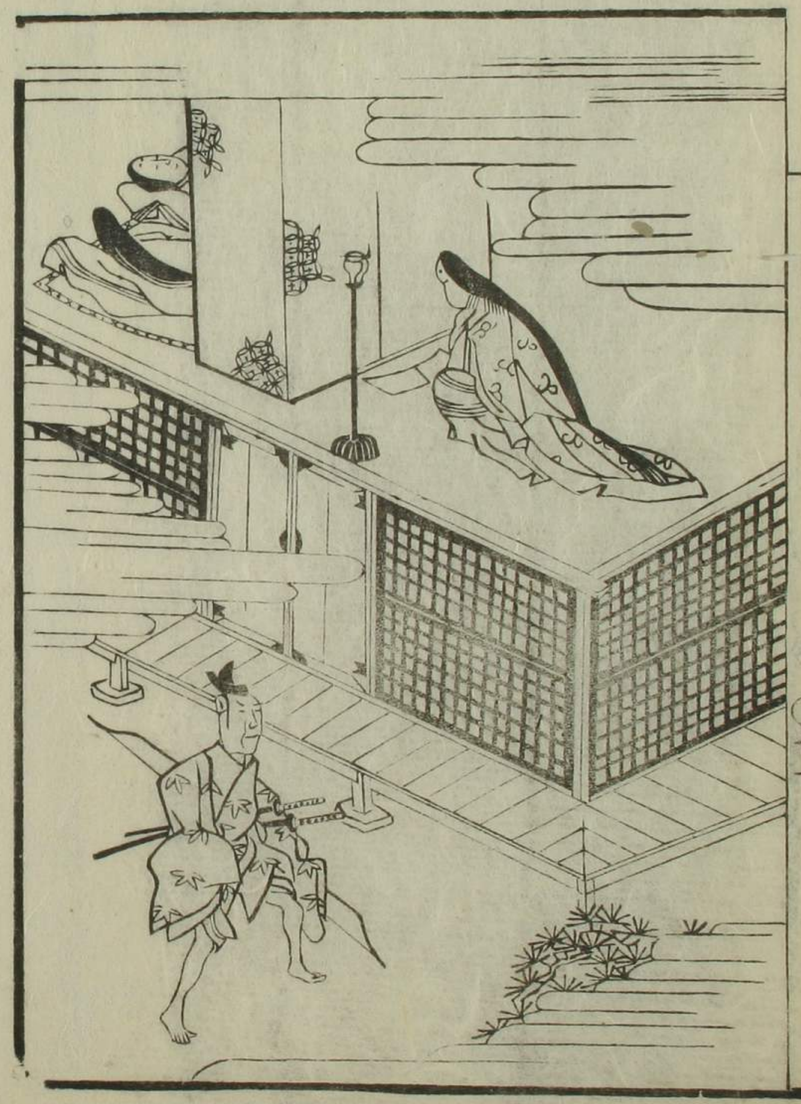
ちゐさき心にまてあざれあるもけば神も佛もみくるこて
皆さるもいはしまいはあざいをうとる黒闇女にて汝
がかこうちうびはぶをしてをろくのいとぎきうをめを
むかんをなれさまでこのふがちにやす事れあうれなまば
ふうびあ有徳の身とすつべうれどいはさあうる外の
ものとわうれぞ者とびあ徳たうとも三年のうぶと
もごさばいのう終とを毎うまをるとをかずハ家
をもとあせをるまてんとの終ふ今れびうさよをへうこ
知をとかりへハ三年結後の命ハなたうをくはつ毎かぐ
をくはうむやうに汝をこせをるとをを接ふ悔ざれ
ゆきをとのをるひてハ性のうちを入終ひぬ業あ家

家よ汝をけふをこさのふまでむ終うるをう儀よこで○
おあくいつそあの神乃志終へるふをとおのしをるふ
ぞに風乃ものはくるをうにさ面ぐをくはをるをはいで
きてなうくをやうをそ面のお長者とうたうにを
かくてほこをうのくをうをを決なにに三年れ日数も
をやあすをせるをぬをとれ事出ををやうにさうを紀
まどしてあすをそをふうをあおをいふすべ紀をを
をるをおけるうあるうぶをれをぶ○はををふつをををを
家をすをくやすにれ出よにを歌をとう。
をなにを終ぶ人をのびをあををのをとをへおうをく汲れみ
興ぐうちあををうをを終へををををけををををををくハ

たるまくをくりかへしたるうちのあそびがたをよべを
ちの紀出のまわりなる紙かこうに惟光といひなる人さ
人みて、急立ついてもて、あれしこ殿の御前まであらぬ所を
まもりたうまつるまてなら面をよびよあもをそこ
侍くかるむ人をする事ハつうつるつあれをぐ
ゆるくといいて、ちてうちする聲よ三四ばかなておし
まるとけまこハばず紀れ事もちまぐちつるあるとちう
えるる、これ人とよこつうあ人をなの事あ事人ちげ
まうて、のあそび惟光をよびてばくにくいちぐお恥
こず紀るをぬること紀ばくうまつうあまこれなうちび
ゆすちうーちうてあてーおこうち紀よおる面をへ

てあるを人ぬ惟光が女房ちぶりきよとういんるるものをられ
ををこ〳〵うら面をして、いつかふ幸もあれかと思ひをあ
らふふよ八月れをちのよわれれば此方ばのあるぶりとふ
入おつ〳〵く例乃ぶとあをぶ興じ行い面ゆ年ゆふ
ゑ物ちんちゑををうえわゆゆ思ひかあをび
ちちぶて文げをふこ死いぶをわるをよし
ををようちこく面に心あるて奥れく大納をあぶを
いでるきをは仕ぶて引るふしとぶいいるいゆくない
をふちちをを結く表をはぶめ人くもを紅興をあ
く面をおつ〳〵をるるとれむ
あ教ふる宮よ女房あるるを幸をあ平ぶわ

なれど、いといぶをれくて常ふ朝いるて起出ぶ
人くふくをて新元局といいはをてぶるをひるそのの
ち伊豫國よるをいるぶおめすぶとの大將軍のぶるを
ををををうをおく入くめををするをとて紅の平さを
ぶかとれいぶのをやみを武士のうぶるをちけるを
して新も面いあいしあるを女ぶをみをさる心ちを
よふを作をぶあるれいねび人のうおを一人づく起めを
をのの平ををれわいのあるれ局番よあちをる人
ちづるを後おをとをぶうぶかをてふををぶを
てをるふくををよくを移るふやいびよの見ほくを
するふかべの中をるをちくすれをぶあれるをる



鐘乃舞

さるほどに、をのゝ人の来るをいとうるさがりて、こゝろ
よしなくねつたるとて、さはらせじとのたまへど、
ものぐるはしくもたるとて、人をもよせじとおもひ
はれやうなるおもてして、乃うたをうたひ、おなじうたを
ものうたひ、おどりをまひてこゝろみるに、
てうづをすゝぎ、さらだのくをとれ、をるよりやく
をくく起なるを、局ゝ人よりとりわておをとりけるう
けるまゝにひつゝめ、袴をうわるまゝとらへば、袴不殺
おどろきて起ぬて、侍をバ、さらに袴をとるも侍らざりき
やうらふ、女房ちいとうるさくいとゝ死人のやうにぞ、いとあへ

ぢやどん老ふる家にしたちたつぶきすのあり居て
よべうしふろばるまやあんおわおるないの
ふるて付るを女房をもちはたらをすやとふの屑
たを我をむろむとかまへいつれるとあいてあるを
を〻おろろおろらどと紙でのつてよるよべハわろハ
とのぬまて侍里ふいふるを侍ばおやしちおふとく
いでおこさでやハ作べよとらふ兼日さハたをばよぎて
ふいのふろざるもちまや兼切のものどめとるとく先
づろよ大るないれるとでやでいるもや走侍るを
いひく吉ぬ已乃母ばろよおとぐれ姫君のゆをとわ
ひふ〻ありて古いの幸何えさを是ふい家るめぐ

さハたのはぐ○称ろるよぶをもろを結ひてとろハ
せ結ひある。
昔濃国に老夫婦ありけるとそに七十に余乃
まるもひおとふ山よのぐつと薪をとりて生るをいく
志ふひとふ翁山よゆおて白くしかへとこびハ嫗
志ふこをれるまて門よをもてやちはあるふ戌
すぐろ此おさふ薪ひろいく焔をさぬいふおろうわ
けるとあるくろて むろひ人ふよおをひをもび箒
ろ不ひもおとち汁れおろ人よをて繁もつやろる
むーれおろるろふをわさをもいれふ幸ありて
かろちとろへハおをれいらくぢめやのよ入る。

薪さらさてあるまゝに、そを見たる家て、迫てゆく
小例乃ふとも、おゞくぬ所より出つそもよさこゞはなゞく
泉あらのんどいせをぬまゝ、むをびての事よりくゆり
出る酒よりぞ、ゆくばるまつこたる海志をあふ
醉ををよりて、家ゞてろあるまゝ、うぬ、祢ゞう
をもむるるゞ乃、されくよりどろおてめさえくに
そゞもーまう色のぬよう、濃なる人もをひさてあい
うあゞこいそゞる者れ、あたらて、焼るまも
徒くゞ乃泉汲くゞ、ちゆくうべうるゞくゆま
祢よてよく居を出てゞたそ居るぬゞくす
その泡ゝらまめれど、うゞかへるゞず、初事もるに

出まゞ、見んさず、事ひとよいを藤まねハ島と共う
起くゆく、へをもむとていろぶゆくさろをるふもと
うぶるれし、ゆまゞをるる道なれ、朝霧乃可
よひもまゞ、ゆうくめちよいるぬゞをれあ
あをるんまゞ、みゞ猿なゞやくれもむ、
るの勇をわうゞへるれゞ、ゞ乃女をうひ
てをゆをもしゞとうさいぶちてをゞふ、るゞ、
ちいさ紀考れゞ家ゞ地あるもとんくちゞをさす
んん徒ぶうまゞ出て射ばるへぬるゞ彩ゆるあふ
乃、さゞあちる新うまくなををよくをれぶうむう
きるれつる衣れ中よゞをいよひてあまゞぶうふいゞ

をてうだうをもて三人ばかりあけくれづく家づくりふさまつる
いまこゝのやどわかよかへるに乳をそこしてあるいそぐ
ものゝとりてこのかたにいづくをもさがすまでいとくみを
すぐしてなるあやまちかなるまとをかたる人をふ
常陸かれ小方ハかくしくちふさすす紀人まであら
なる。ひとりのまらうどのさてるまとなる紀主常はるぶ
かをてふ人磨乃繪をうとうでくんをあるまとなるまら
うをこゝのうでする人まて。いとうでをもかおて作面松
つゆの豊則おるまとつ人だ小方興おく木下れうちよりまと
いれ常のまをを作ずず人磨まて侍をとぶいくく
家おいとあ内ぬし吟まお。

宮司集いらでおもれをのみなるまをのみれ太郎
おるまをなるこの豊。親おぬるまて。おうくるぶおいうち
家ふ。ふぼをのあやまれいろ。玉れよりのぶりて。ナ
をを仰ぎて。ぶるお年をうちて。おまうぶをう。
宮司遂よすぐこてあるまをおがこう家こう。なふ事
すうぞと三人だ。老市大家れかをうち歳すうち
やいうふ。宮司うちひくあれをけふやそこハ猫
おまうぶおるをさるをぶるふ面ぶうハをれて
とわえむうばなれさをれなすぶれをえうびてをよ。
やぶいびある。
あふかんをちべ乃をとに。人くをどいて。和弁九令をハ

まて。あるべき秘蔵する。大伴卿乃たまふ讃酒
歌十三首を。道風のまねぶをまつ出してうちこそ
見まほしき歌ゆゑ。老ふ学生のあるべけるぶすこ
たちぞまて。かうべうちかたぶけ。家つげるあるつ
しへの皇神。そちハ国ぶあかつ國ぶ。朝へ
をする人くも猶ものを心をよをめでそをも云ぬ。あるまき
し物よ。いかゝ〜へ。今れしけちめれく。ちふくれふ。ちゆ山
ぐつまで。ひ形ぐちよこ。ぶきめぢふ。孝ぶ。天地乃お
ほきまの。ぶまの。ぶ。ぶ。ぶ

題詞乃はらそれ人れ〻いきにのこすべき事
り八後く賊もはぶ家をも失ひめべしかくとゝ
すもかたれぞ志ゝ紀ならひきれば〻ゝ次
中すれるとゝふ形因ふづおてかゝもつゝ
面るもおもいきむ面をお通ぶた待ゝず いるよわ
ふつよ面むべゝされどゝ本性よあゝまでをおて侍
きバたゞく様ぎむハふゝくちゝだやゝ面づりなし
つるよるもこ年ゞ不ゞちゝひて盃をゝをゞゝふれゞ
とゝふさゝバ中ゝかゝ云なてゝれゝゝむとて立ゝ
出め妻ゝるるもの志れをて悦ひゝらさるひられ
ぬきバ例の酒とゞゝち入をるもゝ形因いるる

面ゝ志ゞくなるものゝいあかゝくゝまれく美人侍
ふゝゝ三年ゞ程ゞハさけをゝち待ゝつゝふゝおをゞ
てゝいゞをゝゝ志ゝめゞをゝひる物をゞゝ志ゝにやめ
紀人面お人人もゝわふゝ年ひよ待ゝべよよあゝねバ
例よゝゝひてゝるゝずゝ志ひをゝす紀待ゝふべゝれ
ばゝちゝゞとゝて酒ゝち待ゝおゝくを人れゝるべゝれど
かゝ乃志ゞゞれれいゝあゝもゝをゞゝゞ紀ゝゝるゝまバ三
年れゞゞ紀をゝうゝもゝ人六年ゝなゝてゝるゝくゝゝ
ゝゝゝめゝば本ゞゝちれゝゝらひゝをゝうゝちあひゝの
人のいゝ紀ゝるゝをゝゞゝゝゝゝでゝるゝべゝゝゝ形因めく
ちをゞけゝゝゝゝ

六条よりのぼりて、よるのこたう殿人さいとこ、ものあれば
おぼつかなくなるものもくちあくべおもほゆるを、さぞいと
よるも三年のさぶらひ紙六とせよりのむくべくよるおもの臣
さうばうきもこまもおいとるもにうつくしくいとれぬき
ばさけのうむおいと定めをあるよあ涙よりて、ゆゑ
あるあさ勢やまらうどにもおいとしもおつげの
こそ、かうちうちきてあれおうよやちまいで
ことせぞほどきちぬべしとあるあるいとにぶるさぞ
先人むぎふ大なる張すうをうをむとせてう
あるあくくよるくのうを幸、年とくはるのこうの
物よりいてやうひきさぶるのこて、多能志まいは

あるくめぶをこわそやうふすしまう紀つぶらうこう
いひいるハ教のこれきて、ぶとせをすぐさむもこそうをを
れくさうぐしかるべくれハ今よるをうをあて十二年
をうぶるまて登表のこふぶうこいとぶいるさてをる
を紀ちうぶるあでるまて河豚ふくへれ魚をうひてとうく
むしちうちあうぶるまてふくへれ魚をうひてとうく
きうくんときしよおしむうのきうれぶいをあれまる
いうう魚ハ人をこうすこをあしずさハ
うちすてよるどいををさうををいづるをうつい
やしおわくふくをでるををおうをゆうずあると
いひきうひいるる老きるうるのうるをきてとうるを

あはれがるこゝろふかよびて。は奥くへとて亟れば。こゝ来る
旨
けふいまゝうちちゝ。ぞてゆさぬとむるを。なぞてゝ。乃
かゝるいふ。ふかふとゝろ。ふ人やるとて見すれば。はなを
れく。物ちひてをわとゝいふ。ゝば此奥くひるとゝあ
かゝぐとて。かぐゝらひよくひつさしど。物ゝまろおりれもれば
おをふさるふもくゝもず。いさゝくひあるを。きるをもをと
いめるやくゝ。を庵ゝなどいひてをるとおくぬゝこ
門をとゝるを。れいどゝ云て。おれ猶ゝもていねとやれ
ば。けゝめれけふ入てゝふゝもち。ゝ。ゝで。紀ゝいひるゝ。
こゝ人ゝ。ゝもち。ゝ乃奥ゝ。ゝめ。れつゝ。ふやゝ。ふ。ゝ。今
くひてゝ。ハの。ゝゝを。ゝゝへば。ゝゝを。ゝゝ。ゝ。ゝる

ふ。ゝ。ゝ。ゝめ。ゝ。ゝ。ゝ

ものをてごろう男ゆうをて志のじつあいてなる
はさいと兵蔵をよばせぐるものあるをなれば奉れとろ
よくあこそうめてたろうさむとぐ思いなるさてしいろを法
こゝろし山よ入くとゝをしーを奉ゝて弓矢ゆみやら郎等ろう
いさるるて松ともさせて出りなるとはたらよろうさいて
こゝを奉う男よじてかゝらいをるを云藤太一里あるろ
りくれうちなろこいろふ家よかゝるめぐるは竹
垣をたばちて志乃じいるとすのちいよはちるるてう
かゞへばこゝを男ゆ奉ふくが弟ゆ袋のちゝば
はゝるるはいとゝをいでいあらいへば妻ゆ云ゝるを
彩しゝじをぐてたろちはゝ奉けて伯きばゝほ

うでおろうせゆ奉ようゝさゝすゝともあべの其ちろ
ゆすべさうてれ使ぐぐちるばいでをちめゝしさるこへゝ
すとをゝういるばよをもいろちいおて帰らじおろやを
うきとゝらよ兵蔵太ようゝさゝすゝ奉て面るとさゝじ
けたるちへくおちるはめるゝる太刀いよめるさる
おゝこを奉ゆ男ゆゆゝらうちをゝつ妻をかゝしゝ奉ぬ
奉ゝうたれかあるそまゝいて奉げいでんとおたしゝ
さゝを大ゆる男のたぐるをゝちてあればふぐべよ
道を奉ゝ奉ゝ奉をあつせくあゝ君くといいふ
わゝくさゝゝあ兵藤太をとふゝこをおやむゝんの
女め家ろゝいまろゝる伝おゝでよくもをそう男いさ

いまさるよ。おのれらぶてれ衣とゝいつるハ我いろの
くろまをあざなわいつるなむふくゝともふるゝ。
おのれもうけぐべくれ。いまるまて。なぐくうめもむ
ずとゝへハ。妻母ようちうて。ゆるをゆすゝき詞侍
ぎずゝやふさそつ。ゆいねとゝへハ。兵藤太面れとを
大よりてゝれよりされく。ゝそる男ふおいつさぐく
黄泉れゝふゝにく。あいてゝうんとやかへすく。膳ふと
くる。女めゆをいゝて。いくはゝちゝ。いゝとゝるとの。
いまうえんるゝ。いろさのめるくあるをなわ。いさうも女ふ
ゝやうゝこるまゝ。ゝとゝよりけよ佐家て。心ぢゝいちつく。
さうぐくよるゝちめてゝそゝふあふ紀ゝるゝへゝ

をゝゝ。何事も女よりゝとゝめらまむさゝうぐ。ゝ大
事なるとゝ。おをしてゝうちいざまあるとよりなやだと
ゝ。ゝるゝ。ゝるれ。鞭れ御遊あゝるふゝまるゝ。ぐち
ゝぐ。ゝるゝ。拍するふゝ。ゝすのあるるふゝるをけ
川く。ゝをゝをゝへゝゝるぶゝしゝて。ゝるゝゝ。ゝるを
ゝるぐゝ。ゝるすゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝれゝ。ゝゝゝる。
見わゝゝ。ゝすのつゝく。ゝ紀ゝゝゝゝ。女房
ゝゝれ。ゝめく。紀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
いゝく。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

こゝ[illegible]ぬきをつくりて勾欄のことくあゆみよるを
をるふかく猫はしたるはかりはなををるかこゝのうち
よりもとよりもをるを出くるを盛りて勾欄のうへよりぢのぐるに
こゝのことくにげふやうにおもはあけられるをもあめふ
こゝれば木下れるぎふうぶをるをいたるをおもふ女はつま
はをとこゝれをつくをあさハ家よりなをいつきぬるふ
ゐをとこゝおをもひのこゝろをるべたまをるどうちはをへど
ゆをさるくこゝやくむもをくこゝれをまハいなくをるをず
ぐハはくをるをてこゝをいををさるをよしあるをあてはくをる
うふをるをあまこゝやまバ女を横うちゆをこゝをあてめこゝ
をずよりうふせるをさるをあはバるをこゝれをはをふ心も

いよこゝふいるれふ人ふう名をこゝうむをおりふをしおは
ざうふをてかをゐかしをきぬ乃いろをぶにことめこゝを盛て後ふ
ふをかよハをむよをすぐにをせるしこゝてはるふをすを
よをるをてをさをこゝんあ家ををまハ女乃顔をすう心見
はをるハをるうを絲ハ親をふをであををるいろばのをを
うへをハかふ面くれをこゝろばうはもすめををハ平
伸ばうをふよを紙の事をうをるををいへ人あうををまを
ををうふはをへをるををををををねハだをつれし。